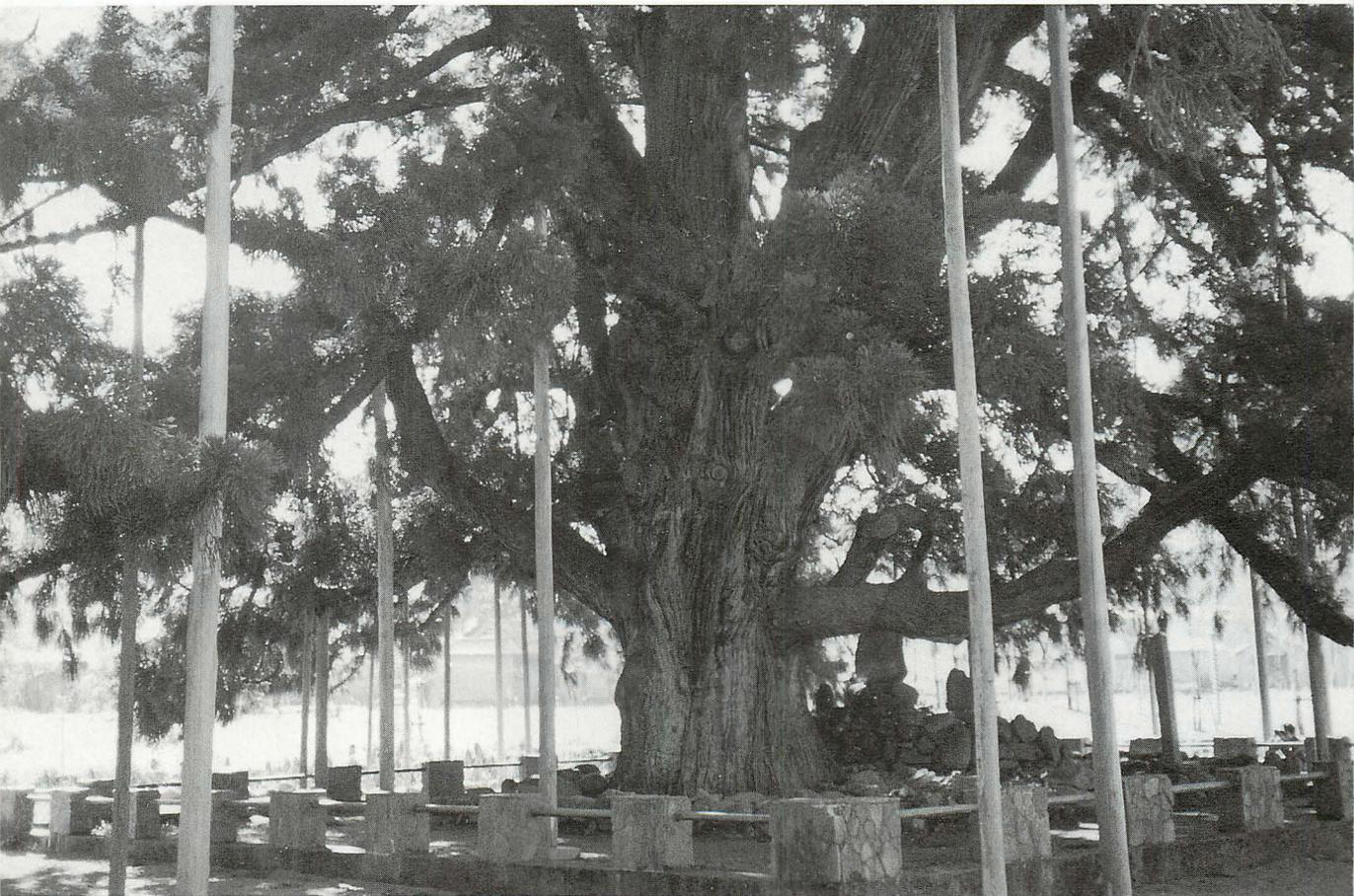


石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第18巻 第3号

おぼけ
御仏供杉

御仏供杉は吉野谷村下吉野の、国道157号線から少し離れたところに立っています。高さが18.7m、幹周が7.5mあり、その樹形が仏様にお供えするご飯（御仏供飯という）に似ていることから、この名がつけられました。九州肥後生まれの大智禪師が、南北朝時代初期にこの地に祇陀寺を開いた後、故郷に帰る際に植えたと伝えられています。昭和13年に国の天然記念物に指定され、また昨年、大阪で開かれた「花と緑の博覧会」を記念して選定された「新・日本名木百選」にもはっています。

ブナ林の復元始まる

白山の自然を代表するブナ林の保護復元事業が、今年度から石川県環境部によって始められました。近年著しく減少したブナ林について、その現況を把握すると共に、積極的にブナ林の復元を計ろうというものです。ブナの苗木育成と、その苗木の現地での植栽・管理などを行っています。また、平成2年10月10日には、県民の方にもブナの重要性を理解してもらうため、市ノ瀬で観察会が開かれました。当日、参加者に種子の採取をしていただき、種子や苗木を植えていただきました。



白山自然保護センターの苗床で育成したブナの稚樹(8年生)。良い苗を作るため、毎年床がえを行なっています。



自然観察会の参加者に苗木を植えていただきました。家族ごとに協力しあい、1人1本ずつ植えました。



新しい苗を作るため、種子をまきました。

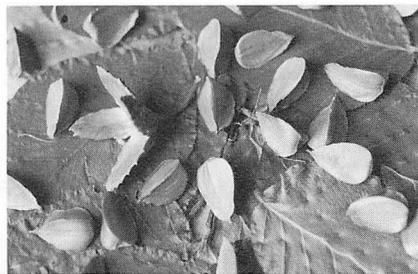


霜や雪からブナの種子をまもるため、しきワラをほどこし、はり縄でおさえました。

自然観察会の参加者によって、ブナの種子が採集されました。昨年はブナの実の豊作の年にあたり、多くの種子を集めることができました。



枝に付いているブナの実(左)と地上に落下したもの(下)。枝に付いている時は、殻斗かくととよばれる固い皮につつまれているもの。



ブナの倒木には多くの種類のキノコがはえます。写真はブナハリタケです。



白山麓の集落の境について



■山本重孝■

あか坂

白山麓の集落の境が決まったのは中世以前と思われるが、お上の年貢が高いことと、道を直したり、病人や死人の世話や始末をしなければならぬので、必要以上の土地は持たぬというのが実情のようであった。あか坂、ほそ越、倉谷、棒作り、中宮の湯などの昔からの言い伝えを拾い上げて見たい。

1. あか坂

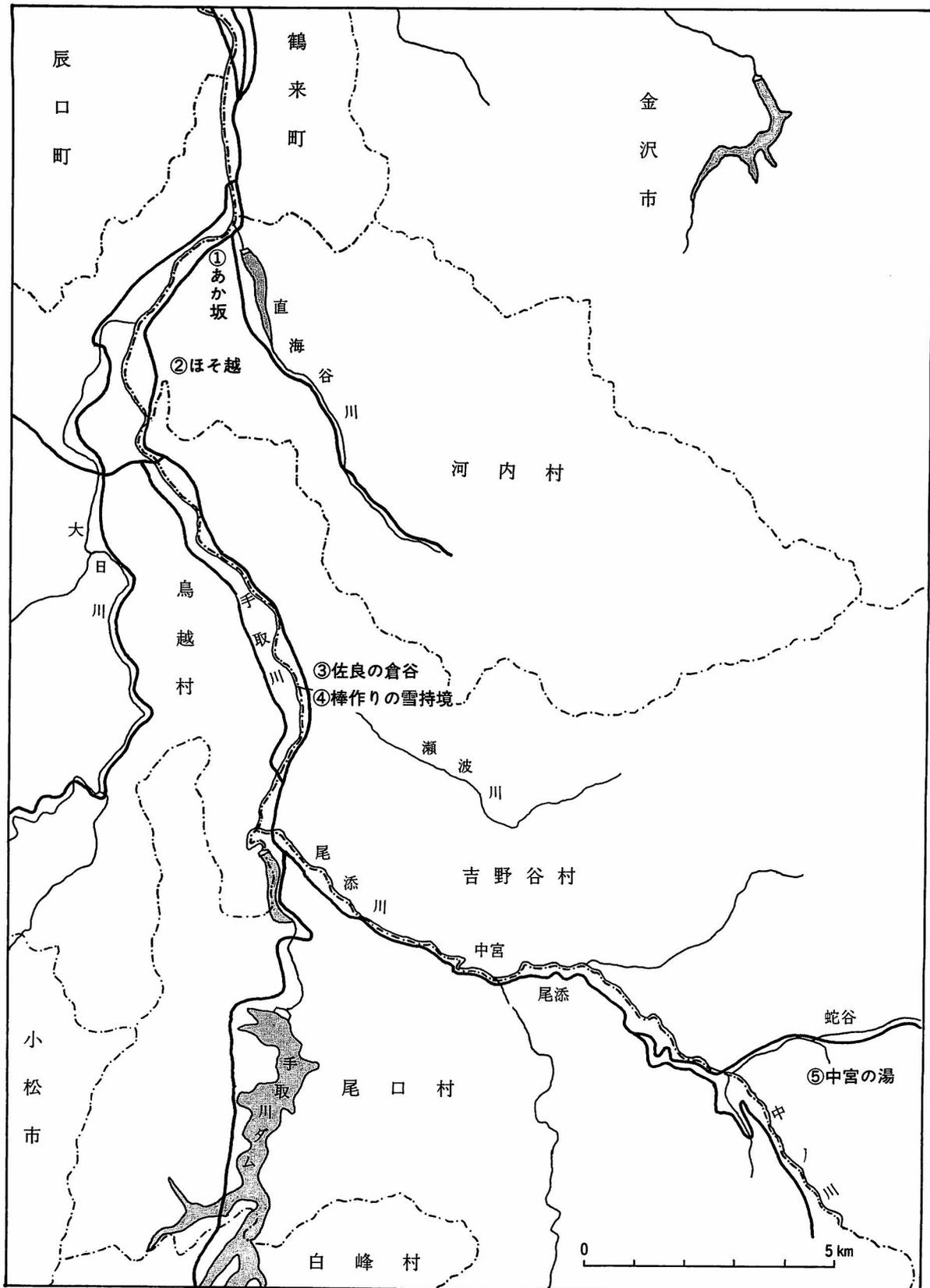
河内村役場から福岡発電所の中の坂をあか坂または墓坂（安国寺の墓所）と言っている。もと福岡の地所であったが、やせた荒地で年貢だけがかかり、難所のため道直しにも苦勞するので口直海に貰ってもらったこととした。福岡の肝煎りが酒二升持って口直海へ行き、やっと貰ってもらったのであるが、帰りしなにこの坂にさしかかり、「でかい在所が持ちきれず小さい在所に貰ってもらうとは恥ずかしいことだ」と恥ずかしく残念で顔が真っ赤になったので、あか坂という名になったと言われている。（福岡集落：田中 博 70才）

2. ほそ越

吉岡のお宮様の近くの国道 157 号線に吉野谷村と河内村の村境の標識がある。ほそ越の土橋から上の尾根伝いを境とすれば自然なのに、こんなにかたよったのにはこんな訳がある。明日村境を定めることになったので吉岡の肝煎りは、上の段（今の道）は山と荒地で出費ばかりでなんにもならぬ。下の段は畠が多いし、河原は川木が沢山とれるから下の段を確保しようと下の段を進んで土橋の下まで来ていた。吉野の肝煎りは上の段を歩き、お宮様の前で待っていたので、そこが境になった。（吉岡集落：中野孝次郎 72才）

3. 佐良の倉谷

瀬波の入口、トンネルの向かいの山を佐良の倉谷という。ここはもと瀬波の領分であったが、佐良は山が狭いので瀬波に頼みこんで譲って貰った。大山持ちの誇りを示そうということも考えられる。（瀬波集落：中村貞義 63才）



地名位置図



吉野谷村と河内村の村境

4. 棒作りの雪持境^{ゆきもちざかい}

瀬波の私の家から南西の山の尾を見ると、尾根からずっと瀬波側に杉の美林が茂っている。ここを市原の棒作りという。山境といえば山の尾か谷に定まっているのに、ここはめずらしい雪持境^{ゆきもちざかい}ということになっている。冬から春先にかけての積雪期間中、山地斜面平坦部には多量の雪が積もるが、急傾斜地には雪はそれほどなく、雪による境界が目視できる。これを雪持境という。藩政の始め頃、山境について瀬波と市原の山争いが起こった。藩では近くの十村や肝煎りを集めて山論を行い、瀬波は奥地に広い山があるから市原の言う通り、雪持境にせよということに定まった。この境を棒作りの雪持境と呼んでいる。(瀬波集落：前多正信 47才)

5. 中宮の湯（かいもち役人）

泰澄大師が白山登頂の道すがら、白鳩が傷をいやしているのを見て温泉を発見され、尾添の湯と呼ばれていた。寛文年間（西暦 1661-1673 年）に尾添、荒谷が天領になった時、村境が蛇谷川から中ノ川にかわったので尾添の湯は中宮の湯にかわった。天正年間に別宮城主吉竹壱岐が道を作り、ゆぎや、宿舎を作って営業を始めた。

毎年道直しに大金がかかり藩の役人の入湯の世話もかかり、尾添村としては大変なお荷物であったが、隣の花は赤いという言葉通り、中宮では欲しくてたまらぬので、かいもちを作り尾添の役人達に御馳走して中宮に貰うことになったので、尾添の村人はかいもち役人といって長い間その時の役人の家を憎んだ。(中宮集落：故 外 一次 80才)

尾添ではこの話は逆で、厄介物の湯を中宮に貰ってもらったので、やれやれとかいもちを作って祝ったということである。(尾添集落：山崎繁雄 82才)

(郷土史家：吉野谷村在住)

イヌワシとクマタカのすみ分け



クマタカの生息環境



■上馬康生■

イヌワシの生息環境

白山自然保護センターでは、昭和60年度から平成元年度まで、環境庁からの委託でワシタカ類の調査を行い、はくさんでも一部について紹介してきました。特に白山では、未知の鳥であったクマタカをイヌワシと比較しながらみてきましたが、今回この2種の生息環境と分布の関係についてのまとめをしたいと思います。

イヌワシとクマタカの分布

調査をしたのは石川県東南部の鶴来町から白峰村にかけての範囲です。以前に、この地域ではイヌワシが標高の高いところに、クマタカが標高の低いところに記録され、両種がすみ分けしているようだとお話ししました（はくさん第15巻第4号）。その後の調査で、記録された場所は2倍近くに増えましたが、やはり同じ様な結果となりました。他の地方、例えば鈴鹿山脈や氷ノ山では、同じ地域に2つの種が生息していて、特に標高による分布の違いはないようです。また、赤石山脈や木曾山脈の標高の高いところでもクマタカが観察されています。ですから両種の分布が単に標高だけで決まると言いきれないのです。それでは白山では、いったい何が要因となり2つの種を分けることになっているのでしょうか。

両種の分布と環境との関わりをみるため、どちらも生息しており、また白山地域の代表的な環境を含むところに重点調査地域を設け、詳しく調べてみました。そのイヌワシとクマタカの分布を表したのが図1です。一つの区画は約500m×500mです。

分布と環境との関係

調査地域は、地形が急峻なところが多く、冬期には標高の低いところでも積雪が2m、深いところでは数mに達するところ。植生は標高の低いところから水田、コナラ林、ブナ林、ダケカンパーオオシラビソ林、ハイマツ林などと変化していきます。標高800mくらいまではスギ植林地が点在し、また全体で最も面積の占める割合が高いのは、標高約600mくらいから約1600mにかけて広がるミズナラブナ林やブナ林です。

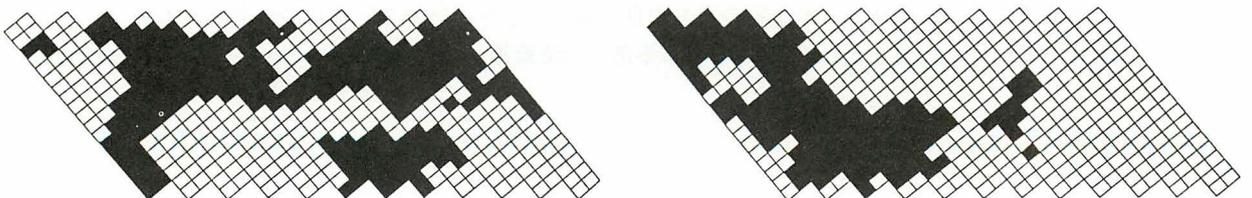


図1 重点調査地域内のイヌワシ(左)とクマタカ(右)の分布

もう少し詳しく環境をみるため、重点調査地域内についての、より細かな植生や地形を調べてみました。方法は地形図及び植生図を、約 500 m×500 mの区画に区切り、情報を各区画ごとに読み取りました。そして、それぞれの項目ごとに面積や量で4つに区分して図にしました。またイヌワシ及びクマタカの分布と各環境の関係を見るために、4つの区分ごとに調査地区全体での区画数、イヌワシの見られた区画数、クマタカの見られた区画数及びその割合を調べ、各項目の図の横に示しました。ただし表の百分率は、各区分の全体での占める割合で修正した数値で示してあります(図2)。

1. 地形

取り上げた項目は標高と起伏量です。標高は各区画の中心の標高で代表させました。重点調査地域は概ね標高 200 m~2000 mの範囲にありますが、ここでは 0 m~、300 m~、600 m~、1000 m~の4つの標高区分に分けて表しました。300 m以下の低地が左側に部分的にあり、右にいくに従って高度を増して、1000 m以上の標高のところが右側にかたまっていることがわかります。

起伏量は各区画の最高標高と最低標高の差で表現してあります。0 m~、100 m~、200 m~、300 m~の4段階で示し、400 m以上は頭の数字を記入してあります。ちなみに起伏量 300 m以上ということは、30度を越える急斜面です。左側の一部を除いて、この地域がいかに急峻な地形であるかがわかります。

表を見ると、クマタカは標高 600 m以下のところで 83.6%と、ほとんどが記録されていることがわかります。またイヌワシは、標高 300 m~1000 mの間で 66.2%みられ、それより低くても高くても少なくなります。次に起伏量をみると、起伏量が増えるに従いイヌワシの記録の割合は増加し、逆にクマタカの記録の割合は減少しています。このように地形的には、クマタカは標高の低いところに、またイヌワシはクマタカより標高が高く、起伏量が多いところすなわち急峻なところに分布する傾向があるといえます。

2. 植生

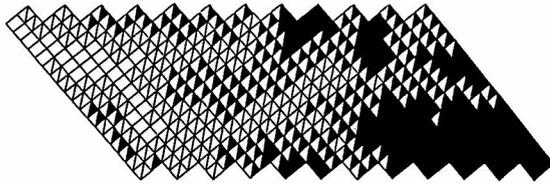
重点調査地域は、全体的には落葉広葉樹林が広がっていますが、それを自然林と二次林に分け、またその他の主な植生である植林地、草原・低木林について取り上げました。いずれも各区画内でその植生の占める面積が、全く無い、1/4以下、1/4~1/2、1/2以上の4段階で表現してあります。

落葉広葉樹自然林は、植生図の凡例のチシマザサープナ群団、ササゲケカンバ群落、ケヤキ群落を合わせてあります。ブナ原生林など自然のよく残っている林です。また落葉広葉樹二次林は、ブナミズナラ群落、クリミズナラ群落、コナラ群落を合わせました。人の手の入った林ですが、自然林には及ばないものの、高木の林に回復しつつあります。主に左側は二次林が、また右側は自然林が広がっていることがわかります。

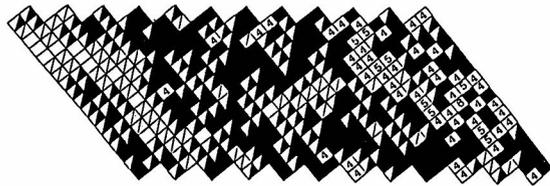
植林地は凡例のスギ、ヒノキ、サワラ植林を取り上げましたが、この地域はほとんど全てがスギです。植林地は左側と中央に少しあるだけです。次に草原・低木林は、高茎草原、ササ草原、伐跡群落、ススキ群団等を合わせました。全体に散らばっていますが、右側に多くあるといえます。

落葉樹林との関係では、イヌワシの分布は、自然林、二次林ともにその面積の違いにあまり関係していないようです。一方クマタカは、自然林の面積の多いところに少ないことがわかります。また二次林のないところでも少ないが、これは図からわかるように自然林

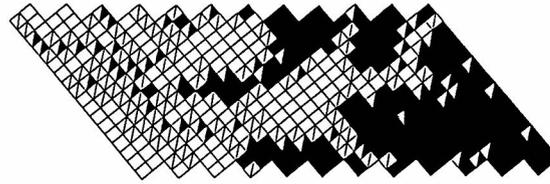
標高



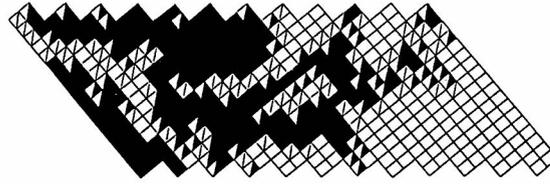
起伏量



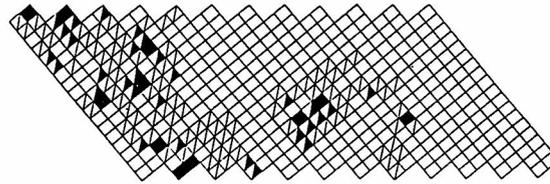
落葉広葉樹自然林



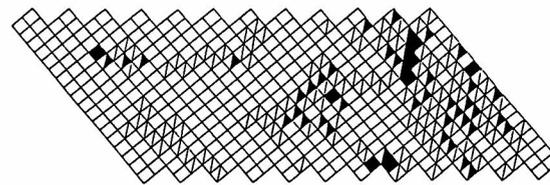
落葉広葉樹二次林



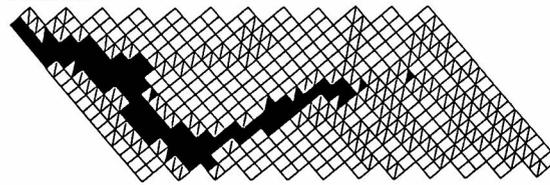
植林地



草原・低木林



人為環境



標高

標高区分	0 m ~	300 m ~	600 m ~	1000 m ~
全体	28	121	182	101
イヌワシ (%)	7 15.7	53 27.7	111 38.5	29 18.1
クマタカ (%)	18 42.0	77 41.6	42 15.1	2 1.3

起伏量

起伏区分	0 m ~	200 m ~	300 m ~	400 m
全体	59	161	157	55
イヌワシ (%)	15 14.1	75 26.0	78 27.5	32 32.4
クマタカ (%)	33 44.4	67 33.1	36 18.2	3 4.4

落葉広葉樹自然林

面積区分	0	~1/4	~1/2	~1
全体	107	104	59	162
イヌワシ (%)	54 26.2	49 24.5	33 28.8	64 20.4
クマタカ (%)	45 29.2	57 37.9	23 26.8	14 6.0

落葉広葉樹二次林

面積区分	0	~1/4	~1/2	~1
全体	136	61	67	168
イヌワシ (%)	44 17.5	27 24.0	35 28.3	94 30.3
クマタカ (%)	10 5.5	25 30.3	28 30.8	76 33.4

植林地

面積区分	0	~1/4	~1/2	~1
全体	295	97	29	11
イヌワシ (%)	142 29.4	42 26.3	13 27.4	3 16.9
クマタカ (%)	53 8.7	59 29.3	21 35.1	6 26.8

草原・低木林

面積区分	0	~1/4	~1/2	~1
全体	265	115	44	8
イヌワシ (%)	126 23.4	51 21.8	17 18.9	6 35.9
クマタカ (%)	105 44.1	26 25.1	7 17.6	1 13.3

人為環境

面積区分	0	~1/4	~1/2	~1
全体	208	153	9	62
イヌワシ (%)	107 31.0	76 29.9	4 26.5	13 12.6
クマタカ (%)	49 12.4	37 12.8	6 34.9	47 40.0

図2 地形、植生、人為環境の分布およびワシタカ類分布との関係

の多いところと同じです。植林地との関係では、イヌワシが植林地の面積の多いところに少なく、逆にクマタカは植林地があるところには面積に関係なく記録されていますが、植林地の全くないところには少ないことがわかります。また草原・低木林との関係では、それらの多いところでイヌワシが、全くないところでクマタカがよく記録されているのが目立ちます。

3. 人為環境

集落の占める面積が1/4以上、または比較的交通量が多く毎日使用される車道のある区画、同じく1/4以下（ほとんどは建物1つ）または交通量の少ない車道のある区画、積雪期閉鎖の車道、歩道、水田、畑、送電線のある区画、全く人工物のない区画の4段階に分けました。この地域の左側と中央の一部に人為環境がまとまっています。また図の1本線のみのところは、積雪期（イヌワシやクマタカの営巣時期に当たる）にはほとんど無人となるところです。全体としては、人為環境の少ないところといえます。この中で、イヌワシは人為環境の多くあるところには少なく、人為環境が少なくなるにしたがって記録される率が増え、逆にクマタカは、人為環境が多くなるにしたがって増えていることがわかります。

ま と め

イヌワシは白山地域では、地形的には起伏量が多く、植生では草原・低木林が広がっているところ、そして人為環境の少ないところに分布しているといえます。今までの観察から、人が近づくと遠くからでも飛び去るなど、イヌワシは人間活動を避ける傾向が強い鳥のようです。起伏量の多いところは、積雪期には雪崩が発生するため人が近づけないところとなります。またそのようなところに巣が見つかっています。そこはまた、高茎草原と呼ばれる草原がしやすいところです。イヌワシは、もともと開けた環境で餌をさがす鳥なので、草原や低木林の存在が必要なのです。これらの条件に合う場所が、白山地域では河川の上流域すなわち標高の比較的高いところにあります。

一方クマタカは、白山地域ではイヌワシより標高の低いところ、二次林や植林地のあるところ、人為環境の多いところに分布しています。巣が確認された場所と、巣材運びの行動から付近に巣があると思われる場所が4か所わかっていますが、いずれも集落から1km以内の林の中です。クマタカはイヌワシとは違って、近くに集落や道路があっても、適当な森林があるなど条件が揃えば生活していけるようです。木にじっと止まって餌の出現を待ったり、林の中の大木に巣をかけるなど、森林との結び付きの強い鳥です。

次に両種が出合った時に、クマタカがイヌワシから攻撃されるのが観察されているように、イヌワシの方が優勢です。イヌワシのいるところにはクマタカはすみにくく、しかも白山地域ではそこは落葉広葉樹林が広く分布し、冬期にクマタカがイヌワシから身を隠せるのではないかとと思われるところ（スギ植林地や針葉樹の自然林など）はほとんどありません。

このようにイヌワシとクマタカの優劣関係に、白山地域特有の地形や植生、人為環境の分布の偏りが作用して、結果としてすみ分けているのではないかと考えられます。

（白山自然保護センター）

白山火山の歴史時代の活動

古文書の記録をもとに (4)

東野外志男

白山山頂部と地獄谷（中宮道より）

天正七年(1579)の活動

白山の頂上部には白山比咩神社の奥宮があり、白山へ登山した人達がそこで
お参りするの昔も今も変わりません。白山火山が活動すれば、その被害を真っ
先に受けるのが山頂部にある室や奥宮の建物です。すでに紹介した長久三年と
天文二十三年の記事にもそのことが書かれていますが、天正七年(1579年)の
活動の際にも奥宮が被害を被りました。“天正七年八月二十八日、白山地獄谷の大穴から吹
き上がって、白山大御前の仏像や社堂を共に破損した(現代語訳、以下同じ)。”という記
事が、17世紀末に成立したといわれる『白山年代記并由緒』や『白山縁起』に記されてい
ます。この社堂は白山比咩神社の奥宮をさしています。天正七年という年は、織田信長が
天下をとってまだ間もない頃で、『古今類從越前国誌』には、“天正七年八月二十六日地獄
谷より火石がふり、社壇やご神体を壊した。翌年六月、織田信長が三つの社を再建した。”
という記事があります。この地獄谷とは中ノ川の支流をさし、白山山頂のほぼ真北に位置
しています。地獄谷の上流部には噴出口を思わせる地形は現在残されておらず、地獄谷の
“大穴”とはどこをさすのかわかりませんが、山頂部からそれほど遠くないところでしょう。
他にこの年の活動を記した記録が三つほどありますが、内容は上に示したものとほと
んど変わりません。活動を開始した日については八月の二十六日と二十八日があります。

『混見摘写』にみられる白山火山の活動記録

『混見摘写』に記されている白山火山の活動記録のほとんどが、これまでの研究では見落とされていたようです。昭和三十六年（1961年）にまとめられた『石川県災異誌』には、『混見摘写』に記されているものとして正保二年（1645年）の活動記録が載せられていますが、この書物には他にも十ばかりの活動記録が記されています。白山火山の歴史時代の活動を検討する際、決して見落とすことのできない重要な文献といえます。『混見摘写』は加賀藩の与力であった吉田守尚が、寛保元年（1741年）から安永四年（1775年）までの約35年間の間に、織田・豊臣・徳川・前田・その他諸藩の武事や奇談、古人の評論などさまざまなでき事を集録したもので、そこには白山火山の活動について、以下の記述があります。

「この度の白山の大きく鳴ったことについてお尋ねがあり、それに対して申し上げたことである。

一、（織田）信長様の時代に白山が鳴った。大雲を吹き破り、その時に（白山比咩神社の）奥宮も壊れてしまい、後に建立した。

一、信長様がお亡くなりになった（天正十年（1582年）六月二日）頃に黒雲が出現し、そのなかから法師の形をした者が三人見えた。

一、加賀大納言（前田利家）様がお亡くなりになったおり（慶長四年（1599年）三月三日）、初七日の間に白山が鳴った。

一、慶長五年（1600年）に白山が鳴った。これは関ヶ原の合戦のためである。

一、但馬（松平直良）様が勝山の藩主でおられた時（寛永十二年（1635年）～正保元年（1644年））、白山が大きく鳴った。これは島原の乱（寛永十四（1637年）～十五年（1638年））のためである。

一、正保二年（1645年）の四月五日と四月二十六日に鳴った。これは筑前（前田光高）様がお亡くなりになった（正保二年四月五日）ためである。

一、大和守（松平直基）様がお亡くなりになった時（慶安元年（1648年）八月十五日）にも鳴った。

一、去年（万治元年（1658年））の九月四日に鳴った。北南のあたりに光るものが一つ山のなかに入った。十月十二日に小松中納言（前田利常）様がお亡くなりになった。

一、当該（万治二年（1659年））の二月晦日に大きくなった。白山に灰が降った。

一、同じ年（万治二年）の六月五日の朝晩夜と一日中鳴った。別山の南北のあたりに黒い雲が出てきた。そのなかから長さ1丈（約3m）くらいの法師が三人見えた。

右（上）の事、牛首村と風嵐村にいた者達が命を慎んで受けて申すには、地獄が大空に響きわたる様子を思い起こすようであったということである。以上。

万治二年六月九日

右の諸々の事、寄合所へ書き上げて申したことである。」

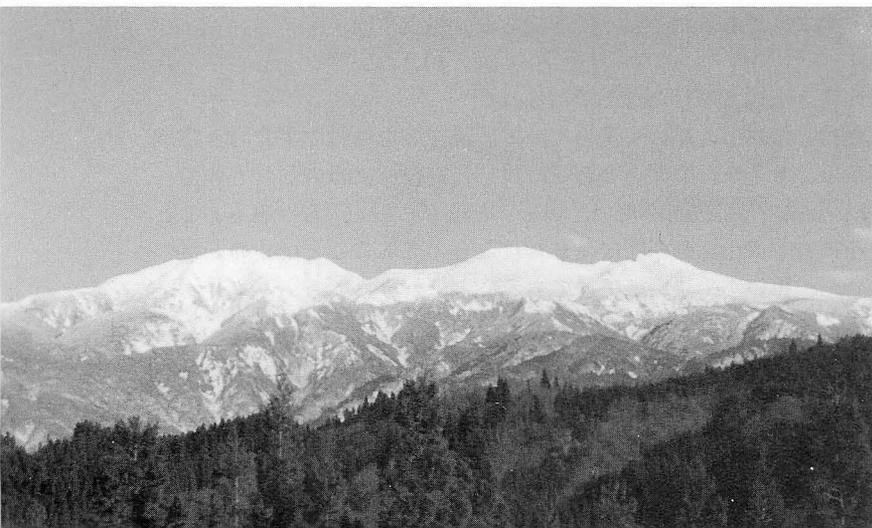
ここでいう牛首村と風嵐村とは白山の麓の集落のことで、現在の白峰村の字白峰と字風嵐にあたります。この記事は、お上からの問い合わせに対して寄合所に報告したもので、ここで「鳴る」（原文では「なる」と平仮名を用いている）とはもちろん「音が鳴る」ことをいっているのですが、その音が火山活動の際に発せられるものであることはこの記事の内容から理解できます。また、黒い雲や法師は噴煙であることはいうまでもありません。

万治二年六月五日に出現した“法師”は、身長が1丈（約3m）で、噴煙にしては少し小さすぎる気もしますが、普通の人間よりはずっと大きいという気持ちを表現したかったのでしょうか。万治元年九月四日の記事のところにみられる“光るもの”とは、一般に流星や彗星、稲妻など空中を光りながら移動するものをさしますが、この場合にその“光るもの”が火山の活動に直接関係したものでどうかははっきりしません。

『混見摘写』に記されている十ほどの記事のうち、記事内容からは活動年代がはっきりしないものが二つあります。一つは一番最初に記してある“信長様の時代に白山が鳴った。云々”です。これはその内容から、さきに紹介した天正七年の活動の事をさしているのはまちがいないと思われます。もう一つは“但馬様（松平直良）が勝山に藩主としておられたとき、云々”の記事です。松平直良が藩主として勝山にいたのが寛永十四年（1637年）から正保元年（1644年）の間で、後述するように寛永十七年（1640年）に大汝峰から長滝寺にかけて火山灰が三寸ほど降るという記事があることから、この記事は寛永十七年の活動を表わしている可能性が高いといえます。『混見摘写』の記事のうち天正十年（1582年）や慶長四・五年（1599・1600年）・正保二年（1645年）・慶安元年（1648年）・万治元年（1658年）の年の活動記事はこの書物だけに載っているもので、貴重な記録です。16世紀半ばから17世紀半ばにかけてのほぼ100年間は、歴史時代の中で白山火山が最も活動的な時期であったということがこれまでの記録からもいわれてきましたが、この『混見摘写』の記事で、そのことがより積極的にいえるようになりました。

寛永十七年（1640年）の活動

この年の活動は『長滝寺莊嚴講執事帳』に記されています。内容は具体的で、しかもこの古文書が美濃馬場禅定道の拠点であった長滝寺（長瀧寺）に残されているもので、信頼できるものと思われます。内容は次の通りです。“寛永十七年（1640年）六月十五日の午後7時頃から夜明けにかけて赤く光った。多くの人々がこれを不思議に思っていると、白山の大汝（峰）より長瀧寺まで、灰が二晩三日のうちに三寸（一寸＝約3cm）ほど降り積もった。そのうちに、空じゅうが赤く光った。不思議なことが多いことであった。経聞坊の慶祐が書きとめたことである。”。空が赤く光るのは頂上部で火山活動を開始したためでしょう。長滝寺は岐阜県白鳥町にあり、白山山頂の南南東約30kmに位置します。そこにおいて三日のうちに火山灰が10cm近く堆積したのですから、このときの噴火が大きなものであったことが想像できます。



白山遠望（白峰村より）



長滝寺（岐阜県白鳥町）

万治二年(1659年)の活動

万治二年の活動は、古文書に記されているものでは最も最近のもので、この年の活動を記したものは、先に紹介した『混見摘写』があります。そこには、二月三十日に火山灰が降ったことや、そしてその後六月五日に黒雲が出現したことが記されています。他にこの年の活動を記したものに『長滝寺莊嚴講執事帳』があり、そこには『混見摘写』より詳しい内容の記事が載せられています。ただし、六月の活動についてのみ記されており、日は『混見摘写』とは異なり六月八日に黒雲が出現したとなっています。記事の内容は以下の通りです。

〃(万治二年)六月八日の巳の刻(午前9時頃から11時頃まで)の頃に、御山(白山)の御廚之池(翠ヶ池)の上に黒雲が少しばかり出た。しばらくすると幾度も幾度も音が鳴り響き、その後、その雲のなかより坊主の身なりで三人が頭をならべてわきより上を現わした。室々の別当(僧侶の職名)はいずれもこれを拝んで、不思議に思っていたところ、三州(三河)はず村の道者六人が仲間に加わり、これを拝んだ。すなわち、御来迎と思って拝んで、元結をとって下山した。しかし、これは御来迎ではない。その後日ごと日ごとに御山が音をだすことがおびただしくなり、しまいに数えられないくらいになり近国まで鳴り響いた。同(六月八日)夜は月が澄みわたり晴れ渡っていたが、月より三筋の光が三方へ流れ、そのうちの一筋の光は甚だしく光り、しばらくして消えた。

一 同(万治二年)六月十八日から二十日まで、越州(越前)の国中に葦毛の馬の毛が降った。慶祐が書きとめたことである。〃

六月八日に山頂でみられた現象は、この筆者もいっているように御来迎でないことは明らかです。黒雲や大きな音など、火山活動が起きたことを示しています。六月十八日から二十日にかけて降った葦毛(馬の毛色の名で、白色に黒色や濃褐色などが混じっているもの)の“馬の毛、”とは、その内容から火口から空中に放出されたマグマが細長く引き延ばされ、細かく繊維状になったものをさしていると想像されます。マグマがハワイの火山のように粘性が低い場合に、一般に細かく繊維状になるといわれています。白山火山のマグマは一般に安山岩質で粘性が高いのが特徴で、通常そのような噴出物は出さないと考えられます。しかし、白山火山のマグマのなかにも多少粘性の高い(玄武岩に近い)組成のものもあり、このときに噴出したマグマもそのようなものであったのかもしれませんが。それにしても、越前の国中に“馬の毛、”のような火山碎屑物が降ったのですから、この時の噴火も活動的であったことがこれらの記事からうかがえます。

(白山自然保護センター)

たより

ブナはおおよそ標高 350~1,600 mの山地に群生する落葉広葉樹です。四季折々様々な景観をみせ、そこに生きる野生動物のみならず、私たちにもはかり知れない恩恵を与えてくれます。以前には、県内全域に広範囲にブナ林が分布していたと考えられていますが、現在は白山山系を除けばわずかにみられるにすぎません。白山地域でも、近年の伐採などによって分布面積が少なくなってきました。石川県が昨年の秋から始めた「ブナ林の保護復元事業」は、この白山の自然を象徴する「ブナ林」を積極的に保護復元し、将来にわたって良好な環境と美しい景観を守り育てようというものです。写真構成『ブナ林の復元始まる』では、この事業の一環として昨年 10 月 10 日に行ったブナ林の自然観察会と、その際に行われたブナの植栽などを紹介しました。

現在定められている村や集落の境界は、それが決定されるのにいろいろな事情があったと思われる。現在の私たちからみれば、少し妙だと思われるようなものの中にはあるようですが、当時としては重要なことだったのでしょう。白山麓の集落の境界について、地元で昔から言い伝えられてきたことのいくつかを、山本重孝氏に紹介していただきました。

『イヌワシとクマタカのすみ分け』では、白山自然保護センターが昭和 60 年度から平成元年度までの 5 年間に行ってきた「ワシタカ類の保護調査」の成果の一部を紹介しました。クマタカについてはこれまでほとんど調査がなされてなく、今回の調査によって行動圏や生息環境などについてようやく明らかになり始めたといえます。

目 次

表紙 御仏供スギ	1
〈写真構成〉ブナ林の復元始まる	2
白山麓の集落境について	山本 重孝 5
イヌワシとクマタカのすみ分け	上馬 康生 8
白山火山の歴史時代の活動	
— 古文書の記録をもとに(4) —	東野外志男 12
たより	16

はくさん 第18巻 第3号 (通巻77号)

発行日 1991年1月21日
発行者 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本確文堂